



14
3157
50
(14)

如竹
林話
七偏人五編卷之中

東亭

妙竹
林話
七偏人五編卷之中

東都

梅亭金我鳥編次



○
此書と飛ハテ大師河原の度り足るを在座中が能楽
亭介あみ連中其不今日に逢へばこそと羨とてやらん
ものと既不在座中ゆゑ家のあまを来りされど猶門にはふい
こそ評義とて居るその折が格子とあけく竝に家主は
源満小突を召されて額あはせにやめられり双方が額

七五

高き野千々程の化あらア思ふてふ所のの、
わてよりやアき程やと程の裏の斑杓よりやア弱いなへけ
人らのたび所を篠田の森や後林より押込されし
ちやア外はがこころのまふ思ふてふ連中うちを化して居
のでもわて一たん逃拂て是を思ふも底腰なるを
自もと一所ふ歩行なせ、
やア思ふてふ所のの、
斑大の自もより弱の、
斑大の自もより弱の、

[illegible]

り^母へ^らぬ^らい^れと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
に^肌ぬ^いて^手の^平へ^はき^きと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
う^う内^と取^けは^れぬ^は八^つあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
腹^もう^うと^と明^め麻^ま竹^{ちく}の^枝で^地平^へと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
下^はと^う腰^{こし}と^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
あ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
う^う内^と取^けは^れぬ^は八^つあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
待^ち巻^きと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き

天^あ窓^{まど}へ^らぬ^らい^れと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
ま^まと^う腰^{こし}と^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
ふ^ふか^かと^う腰^{こし}と^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
う^う内^と取^けは^れぬ^は八^つあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
あ^あな^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
と^と眉^{まゆ}毛^げへ^はき^きと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
と^と眉^{まゆ}毛^げへ^はき^きと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
と^と眉^{まゆ}毛^げへ^はき^きと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き
と^と眉^{まゆ}毛^げへ^はき^きと^うる^るあ^なれ^でて^は裁^どり^出し^し待^ち巻^き

仕方がねあゝ鼻でも塗付ておろへ何ふともめろう一人助
太刀がわるといけとどなるア（ちめふを腰に括れとせう腰
の帯りがゆるうていねへ）うが世千う程の所為でうと心
るゝね（何れでも是付やうと天窓へ納つて守り袋を在
てゐるう）門口の格子へ首をつれとみ中の客子を窺と
うがまゝに括はしてあゝ（いなり）（ちめふ）何れでも飛さんぐ
化りのやうすを知つて居るが先（運入て美つう）（飛へん）ど
うといふ自アおあなり申へいとして此処に倚て居る様り

のど ^{おど} へおのひ々あり 何れかぐても ^{おど} 千や程よりや裏
 の斑犬の方 ^{かち} 強い ^{さう} どのう ^お へ ^{さう} 何れか ^お け ^{ひさ} ほど ^{かち} 斑犬
 より ^あ どの ^あ へ ^い とも ^い ね ^の へ ^さ チヨウ ^さ 何れか ^さ ぐ ^さ とう ^さ
 へ ^さ さん ^さ ぬ ^あ け ^さ ぐ ^さ ね ^さ へ ^さ 何れか ^さ 腰 ^さ の ^さ 所 ^さ
 ひ ^さ とう ^さ とう ^さ 事 ^さ 何れか ^さ ね ^さ へ ^さ 自己 ^さ なる ^さ 武 ^さ 者 ^さ 多 ^さ 一 ^さ とい ^さ
 ぞ ^さ へ ^さ 家 ^さ の ^さ 中 ^さ へ ^さ 何 ^さ う ^さ 音 ^さ ぐ ^さ する ^さ ぞ ^さ へ ^さ 何れか ^さ 何れか ^さ
 小 ^さ 大 ^さ 虫 ^さ 七 ^さ 日 ^さ 未 ^さ だ ^さ と ^さ 騙 ^さ と ^さ 先 ^さ へ ^さ 何 ^さ れ ^さ 事 ^さ 通 ^さ と ^さ せ ^さ る ^さ け ^さ ほど ^さ
 ト ^さ 二人 ^さ 何 ^さ 子 ^さ の ^さ 例 ^さ へ ^さ とう ^さ 何 ^さ 逃 ^さ 出 ^さ たり ^さ 何 ^さ 漏 ^さ と ^さ 何 ^さ 後 ^さ

小果こくわ一ひとたりけり却さか現あらわ林樂亭りんがくどうの窮きゆうの因いん中ちゆう大だい柳りゆう此この
 中ちゆうより現あらわれ出でる大だい魚ぎよが魚ぎよなるありさぬ小こ食じきがうたへ
 平へいらりし云いふもや小こ腰こしを接つぎ大だい魚ぎよもあつりの發化へんげ
 とて忽たちまち地ち例れいとして中ちゆうをとりするされば又また人ひとの眼めむらり
 光ひかりらせとて虎この吸すつてとてえんとてふむらりく虎このち
 甘かんて飛かりしが私わたくし治ちゆへに大だい柳りゆうの發化へんげがえぞうありし
 中ちゆうより出でて飛か初はつきささるさぎまがむらりち小こ少せう訝ぎやうり
 首くびを伸のてあひぐも例れいとして發化へんげを聖せいてふると冠かんりを飛か

千載の早晩車もどれ落しと云ふ人未だ白く時良天
 翁も亦て丹を名^名 ^{テヲスレ} 虚々虚々茶々茶々
 頭であるを拂せ入りの應答も出来ぬと云ふ
 變化をうける入りの殊更天窓の深淵をうけるに在
 る茶々 ^{ヤモヤ} 天窓さんぞ ^{ナニ} 天窓先生と云ふ
 肝を搔きやアおと ^は 方角の執向を知つて居て返す
 仕やうと云ふのであらう ^何 山にも森あるに仕やう

と悠るゝとわやアねう、
ハ知樂るゝとてらるゝを
とて房のどア茶へ目とまりて宜けりやアは方てまひさア
向ふて目とまりて知不合想との心決むもせう鬼
角の世方の化あら人房のどのチ森然ゆ大母が
侍之性てうと、森サくろで目とまりて不相遠也
和り海島流さんて房のくるつてぜ、びんよとて執向と
て食ふ返り付とてをまゝ目とまりてに集てらう茶へ
目とまりて振るとて房のるも知とて、森何報とて冷と

[illegible]

驚き松子の伴へ遊んでる時長七と船八は逗留する
 松子と長七と船八の化の松子の内へ入りたる時
 七いまだもうへと怖るをぬぐつて船八は散眼する
 へと松子と長七と船八の化の松子の外へ出て行く
 松子と長七と船八の化の松子の内へ入りたる時
 七いまだもうへと怖るをぬぐつて船八は散眼する
 へと松子と長七と船八の化の松子の外へ出て行く

打ん振あげて侍も知らぬ下をゆが斬く物と在わう
 ぐまきふみふみ大樹の中あつちうの白東浦塞でかけの付く居る也
 勢よりされて耐るものゝ心処の世にどいろなる年数いれやぞ
 おとしつ南軍用といひるぞ孫子のほう々菓子袋と冠り
 一大家を突出して表の窓子を窺へ所へ飛ハし世にさ
 春はうららかに春へうらむ彼本刀し竹杖でもさうつくえに
 を下をゆが天窓を。コウリ。ヒツシヤノと両方よりして横断
 のあうりと擲せバ下をゆがヘキアアと聲よく花灯を投り

藤井ふじい「あゝともちの夢の酒席をさるのぢやアね」
 自みづか己みづかア美うつくし正ただ不ふ所ところ成なり汗あせ「さまどう隣りんがぐくと老おきなが
 ちちと止とどりやろね」
 餘あまり甘うまく化かわるとめで大だい忍にんさん目め眩くらとて起おきて休やすむとア
 丈だけどう〜ヤあさん小こりやへ性しょうて黄わう々々〜又またさとうでぶあ
 な不ふ天てん家け成なり。コシキリ押おれよぞ老らう形ぎようが飛ひでう〜医い者しゃで
 も肝かんとつゞきを〜りの形のかたちらさん重おもさんの内うちで一ひと走はし性しょうて
 まて呉くれんねる」
 へおぬさま白しろ不ふ衣えて倒たふして居ゐるのづ

大臣先生のおうお薬「さきさき」世に「いふとも死んではまの
ちやたゝまどう早くいやと呼ぶ事ある」お薬「お報しと
是れあつておどく」お薬「飛せん一歩も歩行ね」お薬「大急ぎ
でせうちやア性ねせ」お薬「死人ふらふのを生て悠として
序がむのり」お薬「何処までいふこと仕るがね大急ぎ
でお知らせと報ひて端らあろう」お薬「飛せんはさうさ
あが年坊で自己が影違ふ」お薬「そなたをよすちなる
とおどく候へス」お薬「是ぢやア飛せん性で来る」と二人い

素へ出りてうろたへて居る所をのりて舟をのりて入
るへ修りえ遠くまで今までぬが付たふれが化
の指とて素へ入不敷て仕舞わしねとや理良との
やうな馬車やぬが来て肝をつぶすといいねせ 虚へ見
おちれ入指指いさるる人どうも不吉さんのやうな天を
おちるるふが来ふふふのどへ化の付がいうく膳よ
えんじけとて仕方がねえと付と通りの好男子不敷て
仕はるるへ大悪人おちるるおちるるでせとてせとていうく

素へ入りてうろたへて居る所をのりて舟をのりて入
るへ修りえ遠くまで今までぬが付たふれが化
の指とて素へ入不敷て仕舞わしねとや理良との
やうな馬車やぬが来て肝をつぶすといいねせ 虚へ見
おちれ入指指いさるる人どうも不吉さんのやうな天を
おちるるふが来ふふふのどへ化の付がいうく膳よ
えんじけとて仕方がねえと付と通りの好男子不敷て
仕はるるへ大悪人おちるるおちるるでせとてせとていうく

侍男もあらぬ陽のさきなる時を起しとくどよりへど
どあつちうへ早あつちうとむらうとどと長袋のまき
然脱すところをがへ大陣にあらう陽のあまき
りぢらむさくおあさん此方へおとんまぜト目々下あ
服は角字を海と天をさる男成候は府に掛る
手拭とて手であらぬ振とるがへモシ其年ゆめねエ
かあきでといひわ仕度とて房取ぬめりやとどら
茶のゆめさきうくうがへオ州は人此茶生ふおれ

中一のあ「さうさく」船の朝生うとてそので茶生ふ
しそつて茶のあて「まじ」秋分とてし四若男さあでいれ
いま「何れ鬼のあま早くを裁く」ようう
虚はさん茶の支度とて長なトてさる角字の事天
どある男のあへとて「た振る」そ茶此方らいつつ
て下さいますとて彼方へ不怪な秋へ何れを眺る「此茶」
あに連て来るく中してさるでいれいますう「才法」
元のでいれあす「まじ」お流義ふとていらくいれい



いやは
おきさめし
りやうさん
ふさふさ
とて
人
きん

さんぐすろり利と（きん） 虚ろ（きょろ） へさく（さく） 紀ろ（きろ） へ大柳の化ろ（おおいりの） とき
 きの化ろ（きの） 和睦の仲人（わむくのちゆうじん） 飛さん（とさん） 飛大柳（とだいりゅう） の二ろ（の）
 へそんろ（へそん） 連不（れんふ） 不（ふ） せろ（せろ） 新不酒者（しんふしゅしや） とろ（とろ） 寄
 せ家主の源多湯（せかすのげんたう） とも招き先小琴（まきさきここと） ろ（ろ） 信ろ（しんろ） ろ（ろ） て
 果は仲ろ（はちゆうろ） 打圓居大酒宴（うちえんおほいしゅえん） とろ（とろ） のふけろ（のふけろ）

七偏入五編の中（しちへん入ごへんのちゆう） 読

市川團十郎 芝（し） 教（きょう）

御参上（ごさんじやう）

市川右團治 芝（し） 教（きょう）

嵐 轟（こう） 破（は） 柳（りゅう） 詣（ぎ）

芝（し） 教（きょう）

見山屋

源川（げんがわ）

